直井潔——人と文学（三）

唐井清六

Ⅳ

直井氏は、その後兄夫婦の世話になりながら、三朝や別府などの療養所への出入りを繰り返して創作の仕事にうちこんでいく。その詳細は年譜にゆずりたい。

昭和二十七年に発表された「淵」は、氏の作家精神の昂揚が感じられる中篇小説である。その見事な書き出しは次のようである。

《章三は先刻から見るともなく、まだ新婚後間もないらしい若い一組の男女に目を止めていた。それは一時間程前、深夜の駅から乗込んで来たのだが、体の不具の関係で腰が掛けられず、列車の窓際に、松葉杖をついたまま、凭れている彼とは、通路を隔てた向い側の席を取つて、車内の人達が殆んど眠りこけている中に、如何にもそこだけが生々した感じで、恐らく列車の轟音でもなければ、その会話も一々聞き取れると思える程、時折快活に笑つたりする声等が、いつか彼の注意を惹きつけていた。二人とも洋服で、一見教員風だつた。女の方は取分美人という方ではないが、丸顔の愛くるしい、それでいてどこか智的な閃きのする感じがあつた。が、それ以上に、男の方は見るからさつぱり垢抜けしていて、どことなくお坊つちやんらしいタイプだつた。

始め二人が入つて来た時は、外套を着た儘だつたが、暫くすると、車内のスチームに体でもほてつて来たのか、外套を脱いで、その時には直ぐ女の方が立つて男の脱ぐ手伝をし、その埃を払い落したりしていたが、後から脱いだ自身の外套で、お互の膝から下をぐるつと包んでいた。その為には自然二人の足は、組合わされているか、どうかしている筈だつた。どんな話をしているのか、二人は一向眠そうな風もなく、しきりに話合つていたが、やがて男の方がポケットから櫛を出して髪を撫でかけると、女は直ぐハンドバッグから小さな手鏡を出し、自分で持つた儘、男の顔を映してやつていた。どつちかといえば、女の方が積極的な感じだつた。恐らく年もそう違わないのであろう。どこか姉さんぶつた態度があつた。然し傍から見ていて、そう露骨な感じは殆んどなかつた。それより彼は自分の人生に、これ迄そういう経験が一度もなかつた事が、妙に顧みられて来た。》

「清流」の続編である。章三がこんど四回目の入所をする三朝の国立温泉療養所には、かつて彼が深く思いをかけたことのある谷看護婦がつとめている。彼女は大阪の日赤などに勤務したのち、三年

程前からもとのこの療養所に帰っているのだ。もっとも彼女は、その後療養所の職員と結婚して、いまはひとりの子供まである。

章三は十年ぶりで谷看護婦と再会する。表面は患者と看護婦との淡々とした交渉をもちながら、主人公にはかつての気持がいまだ完全にふっきれていない。

以前は傷痍軍人ばかりを収容した療養所はいまは様子を変えて多くは労災保険、健康保険などの患者によって占められている。章三に目新しいのはその中に女の患者もまじっていることだ。東京の女子大を出て、クインと渾名されている患者がいる。彼女は、章三の小説のファンで、よく口実をつくっては、章三のいる病室を訪ねてくる。内臓麻痺で足に力が入らない彼女は、陸へ上った鷺鳥のような歩き方をする。入所してしばらくして、章三が烈しく倒れて意識を失ったとき、章三の世話をそれとなく親身にみるのは彼女であった。

≪その間、例のクインも、まだ馴染の薄いなりに、日に一度位姿を見せた。そして人の居ない時等、そっと額の濡れタオルを換えてくれたりしたが、それも至つて無表情で、彼は一度お礼を云い掛けて、何故か云いそびれ、それからは態と眠つた風をして、しらん顔をしていた。≫

小説は、こういう主人公の心境を主軸にして展開してゆく。人生の「淵」に投じられた波紋の静かに拡がるように。たとえば次のような場面がある。

≪或日も、彼は、自分では浴室で洗濯出来ず、仕方なく冷い洗面所でする事にした。その為、バケツに湯婆の湯をあけ、片手だけで、松葉杖をついた危つかしい足取りで、運んで行つた。

「まあ、山川さん。大丈夫?」その入口で、谷看護婦に出会つた。

「えゝ、これ位軽いもんですよ」彼は、態と強く云つた。

「でも、ほんとに用心なさいね」そう云つて、彼女はその儘、行き過ぎた。

その時、彼はふと昔の事を思い出した。それは、彼が漸く松葉杖で、歩けるようになつた時、独りで洗濯しようとして、谷看護婦に見つかり、彼のような体で、そんな事迄する必要はないと云つて、半ば叱るように、洗濯物を取上げられた事がある。そしてそんな事でも、その時の彼は、殊更彼女の親切を、強く感じたものだつた。

彼は、そんな事考え乍ら、独り洗濯を始めた。と、そこの便所から誰か出て来た。何気なく振向くと、クインだつた。それも、わざと少し取澄した顔で、ニッコリ笑い乍ら、

「昔の事、お考えね」藪から棒に云つた。然も図星で、彼は一瞬さつと、顔を赤らめた。≫

章三の病室は四人の相部屋で、みな脊髄損傷からきた下半身の不自由な患者たちばかりである。荒井という患者は、母親に付き添われているが、たまにしか姿をみせない高校教師をしている男まさりな細君から、離婚話が持ちだされている。石田という、もと運転手をしていた患者は、ちょっとした擦過傷で死線をさまようほどの気の許せない症状であるのに、遠縁にあたる男の策謀によって無理矢理退所させられてゆく。小心で、おとなしい、みなが影で原女史と呼んでいるのは、やさしい主人を持つ原という女の患者。

「清流」の作者の筆は逞しさを増して、これらの患者たちの姿を過不足ないタッチで鮮かに描きわけてゆく。半月か一ト月でもいいから普通の娘さんと結婚したいと泣いて訴える原爆被災の青年や、

だれにも見送られずひっそり退所してゆく、にぎやかだった韓国人の姿など印象的である。雪夫人という渾名の、腰のわるい色白の未亡人と、その派手な男出入りの話もある。描かれる世界は、如何にも限られた、狭いものだが、それはそのまま、人生の縮図を思わせる。作者の胸には、ゴーリキーの「どん底」のような構図が意識されていたのかもしれない。

結核患者を収容する北寮と身障者の南寮とが自治会できびしい対立をみせる場面も出てくる。さして大きな規模とは思われない、この療養所にも政治的な動きがある。自治会の主導権をめぐってかげで策動し、暗躍する人間のあることを、作者の眼は見逃していない。

章三の心に、しだいにクインの影が宿るようになる。退所の日が近付いた頃、章三は何度かクインを誘って近くへ散歩に出かける。

≪「私この橋渡れるかしら」つい目の前に、幅三尺余りのせせらぎがある。その流れにかけて、丁度筏式に組んだ丸木の儘で作った小さい橋がある。その木の凸凹が踏みしめる力のない彼女の足では、少し心配らしかった。

「大丈夫。落ちた所で、生命には心配ありませんよ」彼は笑い乍ら、自ら松葉杖の足下に気を付け、先に渡った。その後から、彼女は半ば屈み腰に、一足々々臆病そうに、歩みを運ばせる。

「一つ手を出しなさい。僕が持ってあげよう」そう云って、彼は松葉杖を脇に、ぐっと力を入れ、片手を差出した。

「えゝ」そう云って、彼女も手を出しかけたが、不意に顔を赤らめて、その手を引込めた。

「構わないじゃないですか」彼は更にもう一度云ったが、一瞬その時、彼は思い掛けなく、突然強い彼女への肉体的衝動に駆られた。そして心持震えるような気持で、それでもその時、無理にも彼女の手を掴んで、引張ってやろうという気がしたが、急に自分もカッと全身熱くなるのを感じ、その儘手を引込めた。然し、そうして直ぐその手を引込めた事が、何か後悔された。見ると、彼女もチラッと、もう一度彼の方を見上げるようにし、直ぐ又俯向き、屈み腰で、漸く橋を渡った。その間、彼は立つたまゝ身じろぎもせず、彼女の行動を見守るように、凝っと見つめていた。≫

題名の「淵」は、療養所の前を流れる三朝川に一ケ所、淵になっているところがあって、そこで主人公がひとりで、≪兎に角今度は谷看護婦のように、途中で諦めるような事はせず、どこ迄も、飽迄彼女を追求し続けようと思≫う、ラストシーンからえらばれている。この淵は、当然、人生の淵をも意味し、そこに佇む主人公自身を彷彿させるものであろう。

この作品は、昭和二十七年上半期の芥川賞候補作品となった。同じく候補に選ばれた三浦朱門、小田仁二郎、吉行淳之介、小山清、安岡章太郎、武田繁太郎、庄野誠一、伊藤桂一らの作品のなかで、伊藤桂一の「雲と植物の世界」とならんで最有力だった。

「淵」をもっとも賞揚したのは瀧井孝作で、「今回読んだものの中では、私は、直井潔氏の『淵』が、図抜けて佳いと思ひました。山陰の三朝(みささ)国立療養所の、患者たちの群像が、明るい、慈悲光に照し出されたかのやうに、美しく、詳細に描き出されて、此の患者たちの生活のクッキリした、二百五十枚の力作でした。茲の患者たちは、慢性痼疾の病人ばかりで、不具者の集団面を見るやうですが、しかしこの小説には、病人の暗い面は背景(バック)に滲(にじ)んで、明るい面が妙

に美しく出て、読後感が妙に明るい、これが此の小説の特長だと思ひました。亦、此の小説の文章の、カッキリした、平明直写の力強さ、強い筆力、これは比類のない見事なものだと感心しました。(略)尚、この人は以前に、昭和十八年に改造に発表の『清流』といふ処女作があつて、川端康成さんは『清流』をしきりに褒めて、この人を支持すると云はれたが、私は、『清流』の方は若若しい美しさ、こんどの『淵』の方は、成長した力強さがあると思ひましたが……。」と選評(「文芸春秋」昭和二十七年九月号。以下諸氏のものも同じ。)に書き、翌月の「文学界」の「新人の文章」のなかでも、先に引いたこの小説の冒頭のパラグラフをとりあげて「定規をあてたやうにカッキリした、動じない眼で見詰めた、彫刻のやうな立体感があるやうで。この動じない強い眼、ずつと見渡した眼、これがこの作品の佳い所だと思ひましたが。」などと書いた。川端康成は「作家たちの才能は認められるが、今回の作品はみなもの足りない。ただ、直井潔氏の『淵』は、作者の誠実と力とを感じた。瀧井氏の推薦を私も承認した。しかし、是が非でもといふには欠点がある。平板である。もう少し緩急の調子、また書くことの取捨選択が必要ではないだらうか。この作者にも作品にも同情するが、なほ印象の鮮明が望ましい。もしこの作者の処女作「清流」ならばよいと思ふ。その他の候補作については、特に言ひたいことはない。」と評した。丹羽文雄は、当選作なしの立場で、「しつかりとものを見てゐる人だ。水の澄み方を連想させるこの作者は、瀧井さんが、たくさんは書けない人だと言つてゐた。さうだらう。病人小説といふジャンルを何となく考へさせる小説だ。もうすでに出来上つてゐる人だ。」と述べる。

否定的な見解にたつたのは坂口安吾で、「『淵』はまとまつた作品であるが、私はこういう悪玉の書けない、もしくは書く意志を持たない作家は好きではない。つまり人の悪を許したり、目をそむけたり、見のがしたりすることで、自分の悪にも目をとじてしまう。そういう世俗的な処世法が思想の根柢となつているから、私はこういうものが本質的な通俗文学だと思うのである。委員の二三氏の意見に、この作家はシンが強いという賛辞があつた。シンが強いという意味がよくのみこめないが、シンが強いということが文学の値打とは思われないし、たぶん本質的な通俗性をさしてシンが強いと云つているのではないかとも思った。」と安吾一流の評価である。舟橋聖一も「『淵』(直井潔)は病人の作といふ点で同情されるが、その割に、好奇心が煮え切らず、案外、通俗だった。」と同じ主旨の発言をしている。

佐藤春夫の次のことばが、この時の雰囲気をもっとも集約して伝えていることになるだろうか。「瀧井君の力説する『淵』は瀧井君の云ふが如く堅実で筋金のとほつた頼もしい力作には相違ないとは同感するが、この沈痛なリアリズムはあまりに平板で、押の一手だけでは曲が無さすぎるやうな不満をおぼえたのは僕ばかりでも無い模様であつた。それで瀧井君の力説は所詮瀧井好みに過ぎるやうな感じがする。(略)『淵』を採ると云へば『雲と植物の世界』のために不同意を感じ、では『雲と植物の世界』を採るかと云ふ段になると『淵』のために不公平な気がする。さうして是が非でも採らなければならない程のものはどちらにも感じられないもう一息の作品といふのが僕の席上の感じであり、一座みな相似た心持のやうに見えた。」

こういう次第で「淵」は受賞には至らなかったが、その年、志賀直哉の序文を付して、中央公論社から単行本として上梓された。直哉は序文のなかで、銓衡時、評価の大勢となった、この作品の「平板」さにふれて「私は平淡過ぎても、それでしまいまで読ませ、あとに清々しい味を残すとなれば平淡に過ぎるといふ事は必ずしも欠点ではなく却つて特色だと考へるのだ。」と書いている。瀧井孝作もこの点について「病人の群れといふ所にもう大きい曲折があり、これをまともに写したのが佳いので、これ以上曲折をつけると、又いやなものになると思ひました。」（「新人の文章」）と述べている。

芥川賞の選評いがいの同時代評としては、「文学界」（昭和二十七年三月号）の「小説月評」（三好十郎・丸岡明・西村孝次）をあげておきたい。「どこか北條民雄の癩ものを偲ばせるところもあるが、むろんあれほど暗くもなければ痛切でもない。かすかに死の影がさしてはゐる。だが、生のほのかな匂ひに消され、小春日和といった風情である。だから、思想としては浅く、省察としても薄いが、そのかはり感性の微光の好ましさが、全篇に漂つてゐる。これは、性格といふよりもむしろ人柄に近い。」

さきに瀧井孝作が「慈悲光」といい、ここでは「感性の微光」という、この比喩的表現は、もちろん作品から映発して出たものであることは言うまでもあるまい。それは、「淵」の世界が、一種宗教的な光源に照らしだされていることをいみじくも語っていはしないだろうか。主人公の態度が傍観的にすぎるという不満や、微温湯につかったような作品のトーンを物足りないとする批判も、裏返していえば、この作品世界が、《絶望の底を》なん度も《潜り抜けて来た》者によって捉えられた、観照の世界であることに由来している点は見逃してはならないところであろう。

V

《この雀の話は、平凡な私の一生で、案外いつ迄も離れられない、懐しい思い出の一つになつてくれるに違いない。》という静かな語りだしではじまる「保養所の雀」は、雀と人間との交情を写した、しみじみした佳作である。

新しく重度の戦争傷痍者のために設けられた別府の保養所に入所してみると、一羽の雀が患者たちの間で大へん人気者になっている。それは近所の子供が捕えてきた子雀を育てているうちにすっかりなついて、今では保養所の一員といった顔で暮しているのだ。やがて雀はだれよりも《私》になついてくる。松葉杖をついて歩く《私》（そういう事の出来る患者はこの保養所では数少ない）の肩や頭の上にとまったままついてくるのだ。しかしその雀も、主人公が病室を一階から二階へ移すと、とたんに寄りつかなくなってしまう。雀も、猫のように、人よりも場所につくものなのかと思いながら《所詮何事にも深入り出来ない自分の性質の一端をそんな雀からも思い知らされるような気がし》て《私》は淋しく思うのである。この言葉には、なんとなく「淵」に書かれたクインとの、その後の経過が暗に語られているような響きがある。

冬に入って《私》は、餌に不自由するであろう雀たちのために、施行と称して庭に粟を撒いてやる。他のたくさんの雀たちと一緒に餌を啄んでいる例の雀をみて、《私》はふとその雀が二階の自分の部屋へ飛んでこないとは限らないような気がしてくる。そして、それは意外に早く実現をみる事になる。ある雨降りの日、雀はずぶ濡

れになって飛んでくるのだ。

《雀は、一寸ためらい気味に近寄って来、一旦その灰皿の粟をつゝき始めたが、濡れた体が寒いか、羽根をぶる〳〵震わし、砂浴びでもする時のように蒲団の凹みに体を埋めるようにした。私は直ぐ以前してやったように私の懐を開いてやった。と雀はそれを待っていたように、急いで私の懐の中へ飛び込んで来た。私は久し振りにそれこそ家出した自分の娘が又自分の懐へ帰ったような気がした。そして今度は、もう二度と前の時のように、雀と疎遠になるような事はしまいと思った。》

それからはその雀は、前よりも一段と《私》になつき、離れぬようになるのである。

志賀直哉は、晩年、自宅の庭へ飛んでくる雀のために、毎日、水とパン屑とを用意したと伝えられるが、その点直井氏が先輩である。

雀はやがて相手を見つけて、二羽で飛来するようになる。そのときの《私》の驚きと喜び。野性を失って、なまじ人間になついたばかりに、この雀はかえって不幸なのではないかと心配していただけに心を開くのである。《私》はそういう雀の姿を見届けて、やがて来る退所の日をむかえようとする。これは、志賀直哉の「山鳩」の世界にも通ずるはなしである。

「鶸」という小品がある。やはり野性の鶸を餌づけした話だ。飼いだして間のない頃、鶸は部屋から飛び出してしまう。《まだすり餌をやっていて迚もひとりで餌を拾う才覚もないと思うと、みすみす死なすような気がして外へ出た》氏は、すぐ近くの松林へ出て行って、大声でピー公という名をよぶのである。最初は応答もなく、あきらめて部屋に帰るが、落付かない氏はまた外へ出てゆく。今度は返事の声がきこえて、五、六メートルのところの松の枝の辺を飛び交うのだが、どうしても氏のところへは飛んでこない。止むを得ずひき返すが、氏は三度気をとり直して松林へ出向いてゆく。こんどは一声で返事がかえってきて、二、三メートル近くの灌木まで飛んでくるのだが、松葉杖をついている氏は、むこうから乗り移ってくるのでもない限り、自分の手で捕えることは出来ない。しばらく両者は掛け合い万歳のように呼びかわすのだが、或瞬間、鶸は氏の肩に飛び移ってくるのだ。

《一旦僕の手から逃げ出したものが再び僕の所へ舞い戻ってくれたという事が何か心と心のふれ合いでも感ずるようで嬉しかった。そしてこんな事は他の事では滅多に経験出来ない喜びだった。》

雀や鶸がいつのまにか、人間と同じ実体をもったものとして迫ってくる。こうした生き物への対し方は、志賀直哉と共通のものである。「城の崎にて」で、ふつうならば捨てて顧みられることもあるまい小動物の死が、人間の死と同じ重味で扱われていたのを想い起こしてみるとよい。しかも、なんらの不自然さを伴うことなしに。これは、直井氏が志賀文学に学んだというよりも（こういう事は学んで得られるものではあるまい）、同じ血筋をひく作家であることを証しだてしているというべきであろう。

Ⅵ

直井氏は、昭和三十五年十月、別府の療養所で知り合った《同じく身体は不自由だけれど、きわめて心の明るい妻》（「暗夜行路と僕」）と結ばれて結婚生活にはいる。妻は大阪生まれの東山千代子と

いった。二人はやがて兵庫県明石市に一家を構え、口を糊する手段として自宅で数学と習字の私塾をはじめる事になる。この結婚前後のいきさつについては、新作でこのたび平林たい子賞に選ばれた『一縷の川』（新潮社版）の中ではじめて語られている。これより数年間、氏の年譜から作品がとぎれるが、おそらく暫くは筆を折る覚悟で、自活するため生活に専念したものと思われる。この頃の日常を写したものとして「露の宿」が佳品である。

氏の作品には、「志賀さんが読んで、私に、『直井君はこんどは変わったものを書いたヨ』とやや興奮の語調で云はれた」（「志賀さんの生活」）と瀧井孝作が伝える、聖書の物語である「ユダの告白」や、昭和四十四年上半期の芥川賞候補作品となった、ギリシャ神話に取材した「歓喜」のようなものもあるが、やはり本命は直接体験に根ざした私小説であろう。「淵」の中で《その時々の人生の断片を所謂僕流の作品として、一つでも二つでも書き続けられるだけ書いてゆく》と主人公をとおして語られているが、氏の作品の多くはそうして書かれてきたし、これからもそのようにして書きつがれてゆくことであろう。不幸な運命をうけとめ、非常な苦しみを経験しながらも、まっとうに生き貫こうとする、その生への姿勢が氏の作品を立派なものにしている。その点でも志賀直哉の文学と一つに重なるものである。筆致は驚くほど清潔で、素直である。直井潔のペンネームは、氏の作品に如何にもふさわしい。

単行本『淵』の帯には、出版社によって「最初の傷痍者文学」の文字が記されているが、氏の作品はおそらく傷病軍人の手になる唯一の文学であろう。氏はあるとき、「反戦小説を書く気は？」という新聞（「新大阪」昭和二十七年九月二十四日）のインタービューに、それをきっぱり拒絶する返答をし、それに対して「直井さんは戦争でナマ殺しにされたのだから身をもつて反戦小説を書くべきだと思うのだが…。」の記事がのっているが、たとえば《いつどんな時代が来ても、政府は君達を路頭に迷わせる様な事は絶対しないからと、何度も耳がたこになる程きかされて来た過去の空しい口約を思い、戦争の為、一生を不具者として惨めな生き方をしなければならない自分達の運命に、今は抜く事も出来ない強い反感の根を下していた》（「淵」）ということばなどには、もっとも低声に、控え目に語られた反戦文学の声をきく事も可能だろう。

直井氏は、昭和四十四年三月、松葉杖をついて妻と共に上京、はじめて渋谷常盤松に志賀直哉を訪ねた。実に書信の往復が始まってから二十七年目の事であった。それから二年後に志賀直哉が他界していることを思えば、一期の思いを托しての訪問であったにちがいない。直哉は食堂の壁に掛けて、長年親しんできた十一面観音の懸仏をはずして直井氏に手渡されたという。瀧井孝作は「志賀さんが直井潔君に初対面で、これをすぐ与へられたのは、深く不便（ふびん）な者とかはいがつて居られたらしい。」（「志賀さんの生活」）と書いている。

臼井吉見はある座談会（「短篇小説の今昔」出席者・伊藤整、平野謙、臼井吉見）で、五十歳をすぎてから瞠目するような創作活動を展開している藤枝静男をとらえて「門下から藤枝静男を出したことは志賀さんの名誉でもある。」ということを語っている。意味合いは異るかもしれないが、同様のことは、直井潔氏のばあいについても言い得るであろう。

直井　潔年譜

大正四年（一九一五）

四月一日、広島県広島市石見町に生まる。本名溝井勇三。父槌松（明治二十二年生）母タマノ（明治二十四年生）の次男。長兄栄（明治四十四年生）のほかに前年次兄秀男が出生しているが、生後四十五日で死亡したため現在、戸籍では抹消され、勇三が次男の扱いをうけている。当時、父は市中で小さな鍛冶屋を営んでいたが、やがて失敗し、その後、呉や因之島の工場を転々とすることになる。その間、母は子供二人をつれて親戚に寄食し、三度の食事にも気兼ねするような苦労を経験する。

大正五年（一九一六）一歳

父が神戸の川崎造船所に就職したため、一家をあげて神戸市長田区大谷町三丁目へ転住。

大正九年（一九二〇）五歳

四月二十五日、妹操生まる。

大正十年（一九二一）六歳

四月、兵庫県東須磨小学校に入学。この頃、父は造船所をやめ、神戸の山手のある個人病院の賄の仕事を母とともにはじめた。

大正十五年（一九二六）十一歳

七月三日、弟章允生まる。

昭和二年（一九二七）十二歳

四月、兵庫県滝川中学校に入学。十二月二十日、父槌松、胃癌のため三十八歳で死去す。以後、母が独力で賄の仕事をつづけ、三人の子供の養育にあたる。

昭和七年（一九三二）十七歳

三月、中学卒業。神戸湊東区役所税務課に勤務。

昭和十年（一九三五）二十歳

雑誌「富士」に名作物語として掲載されていた志賀直哉の「范の犯罪」を読み、感銘をうける。それまで大衆小説を主として読んでいた読書傾向が一変する。

昭和十二年（一九三七）二十二歳

七月、日華事変勃発。八月、応召になり兵庫県篠山歩兵七十連隊に入隊、半月余りの訓練をうけたのち、輜重特務兵として華北戦線へ派遣される。

昭和十三年（一九三八）二十三歳

一月五日、大阪毎日新聞神戸版〈戦線から故郷へ〉の特集記事に出田部隊溝井勇三特務兵として「寅年の勇士から幼な友達へ」なる一文を発表。七月、徐州作戦に参戦中、悪性の赤痢にかかり、多発性関節炎を併発して手・肢・首・腰の関節が曲らなくなる。上海の兵站病院まで後送されたのち、月末、内地送還、広島第二陸軍病院へ入院。一ケ月あまりして大阪府堺の金岡陸軍病院へ転院。

昭和十四年（一九三九）二十四歳

四月、退院、自宅療養にはいる。母は、担当軍医からせいぜい四、五年の寿命であることを宣告され、同じ死なすなら家の畳の上でという気持からの処置であったという。これより約三年間、寝台から一歩も動けない状態がつづく。体は絶えず痛み、神経も苛立った。しかし、回復の望みは捨てなかった。

昭和十五年（一九四〇）二十五歳

この頃、生涯、不具者で終わることを自覚するようになる。何度も自殺を考えた。病床で斎藤茂吉の「万葉秀歌」や志賀直哉の「范の犯罪」「城の崎にて」などの短篇、親鸞の「歎異抄」「和讃」な

どを暗記する。暮頃、「ホトトギス」にはじめて投句する。

昭和十六年（一九四一）二十六歳

三月、「暗夜行路」後篇の暗記をはじめる。四月、鳥取県の三朝村傷痍軍人療養所に入所。温泉療養いがいに効果あり、半年ほどして松葉杖での歩行が出来るまでに回復する。七月、朝日新聞の懸賞小説に応募して当選、「父となる」（未確認）が掲載される。十月、療養所を退所。十二月八日、太平洋戦争勃発。暮に和歌山県の白浜町傷痍軍人療養所に入所。

昭和十七年（一九四二）二十七歳

二月、「暗夜行路」後篇の暗記を終える。四月、「温泉煙のまとひてうるむ宿の梅」の句が「ホトトギス」に初入選。六月、志賀直哉に原稿の閲読を乞う手紙を書き、おりかえし承諾の返事をうける。七月、退所して兄夫婦の世話になり小説の執筆にかかる。十一月、「清流」を書きあげ、直哉のもとに送る。下旬、白浜に再入所。この頃、母は賄の仕事をやめ、住み込みの家政婦として働いていた。

昭和十八年（一九四三）二十八歳

三月、白浜を退所。四月、「清流」が直哉の推挽で「改造」に掲載される。直井潔のペンネームを使用。月末、母と亡父の墓参に広島へゆき、約一ケ月叔母の家に滞在。十一月二十五日、母タマノ、脳出血のため五十二歳で死去す。十二月、「母親」を「改造」に発表。

昭和十九年（一九四四）二十九歳

三月、「母親」が第十八回芥川賞候補作品となる。八月、三朝の療養所に入所。十月、「母親」が『日本小説代表作全集』（12）に収録される。

昭和二十年（一九四五）三十歳

一月、「雨」を「文芸」に発表。三月十四日、三朝を退所。十七日、神戸大空襲にあう。『清流』（「清流」「母親」「班長」の三篇を収める）が小山書店から単行本として刊行されるが、折からの東京大空襲で書店の倉庫ですべて焼失する。四月、広島に嫁いでいた妹が夫と死別して帰宅。航空兵の体験談をもとにした戦争小説を書く。八月、「松葉杖」を「文芸」に発表。十日、妹と一緒に広島の叔母のところへ疎開、原爆投下直後の広島で終戦をむかえる。叔母の家で倒れ、三、四年忘れていた関節の激しい疼痛をおぼえる。十月、妹に付き添われ山口県の湯田温泉療養所に入所。

昭和二十一年（一九四六）三十一歳

二月、第一創作集『清流』（「清流」「母親」の二篇を収める）を小山書店より刊行。十一月、「霜の朝」を「座右宝」七号に発表。十二月、病状思わしからず、三朝の療養所へ三度目の入所をす。「雨」が『日本小説代表作全集』（13）に収録される。

昭和二十二年（一九四七）三十二歳

七月、二年ぶりに神戸の兄の家に帰る。

昭和二十三年（一九四八）三十三歳

春、阿川弘之の訪問をうける。

昭和二十四年（一九四九）三十四歳

五月、「孤老」を「世界」に、八月、「陽子の環境」を「小説界」に、十五、二十二日、「春の宵」を「週刊労働」に、十月、「春愁」を「文芸」に発表。

昭和二十五年（一九五〇）三十五歳

六月、「ユダの告白」を「作品」第五号に、十一月、「淡雪」を「月刊神戸」に発表。三朝の療養所へ四度目の入所をする。この年から、豊岡で出されている京極杞陽主宰の俳誌「木兎」に投句をは

じむ。

昭和二十七年（一九五二）三十七歳

二、三月、「淵」を「世界」に発表、第二十七回芥川賞候補作品となる。有力作品として最後まで残るが、この回は該当作品なしとして惜しくも選にもれた。四月、退所。五月、兄にともなわれ、「暗夜行路」の舞台である尾道を旅行す。二十五日、「私の宗教」を「東海毎日新聞」に発表。六月十六日、「漱石の作品に就て」がラジオ神戸から放送される。七月十日、「志賀先生と私」を「神戸新聞」に書く。九月、志賀直哉の序文を付し、『淵』を単行本として中央公論社より上梓。十二月、「悔恨」を「文芸春秋」に発表。

昭和二十八年（一九五三）三十八歳

八月、大分県の別府保養所へ入所。十三日、ラジオ番組〈ラジオ絵葉書〉で「親友」がJOBKから放送される。八月、「親友」、十一月、「兄と甥の手紙」、十二月、「幼き日の思い出」を「木兎」に発表。

昭和二十九年（一九五四）三十九歳

一月、「屑拾い」を「木兎」に発表。三月、別府の保養所から退所。七月、「しのぶ草」を「世界」に発表。二十六日、「三分の理」を「四国新聞」に書く。九月、「従姉」、十二月、「蜘蛛」を「木兎」に発表。

昭和三十年（一九五五）四十歳

一月、「ほととぎす」、「木兎百号記念の為に」、四月、「死者の声」、七月、「へそまがり」を「木兎」に発表。七月、別府の保養所へ再入所。十一月、「初恋」を「国立保養所」（三周年記念誌）に発表。

昭和三十一年（一九五六）四十一歳

二月、保養所を退所。三月、「朝顔の種」、六月、「母の思い出」、七月、「吾が思い出のアルバム」〈(1)最初の写真、(2)断片〉、九月、〈(3)おいやん、(4)風船〉、十月、〈(5)猫、(6)餅搗、(7)嘘と本当〉、十一月、〈(8)小学校の先生〉を「木兎」に発表。「保養所の雀」を「心」に発表。

昭和三十二年（一九五七）四十二歳

自伝的な小品文である「吾が思い出のアルバム」の連載をつづけ、二月、〈(9)題ナシ〉、三月、〈(10)ナシ、(11)卑怯者〉、五月、〈(12)兄の親友〉、六月、〈(13)四月号から、(14)癲癇〉、七月、〈(15)冒険、(16)入魂〉、八月、〈(17)試胆会〉、九月、〈(18)若い叔母〉、十月、〈(19)母の言葉、(20)ルンペン猫〉を「木兎」に発表。また四月、「貧者の一燈」を「沐陽」（別府保養所四周年記念文芸誌）に発表。

昭和三十三年（一九五八）四十三歳

三月、別府の保養所へ入所。二月、〈(21)父の思い出（其一）〉、三月、〈(22)父の思い出（其二）〉、四月、〈(23)父の死〉、五月〈(24)父の死後〉を「木兎」に発表。六月、「子供の頃」（「吾が思い出のアルバム」のなかの、母の言葉、ルンペン猫、冒険、試胆会、兄の親友の五篇を収めたもの）を「心」に発表。八月、〈(25)後家〉、十月、〈(26)母の落胆〉を「木兎」に、十一月、「親切心」を「文芸大分」（創刊号）に発表。

昭和三十四年（一九五九）四十四歳

一月、「来賓」を「ひだまり」（No.8）に発表。七日、N・H・Kラジオ劇場でドラマ「雪おこし」が第二放送から放送される。四月、〈(27)中学校の先生〉、五月、〈(28)抵抗期〉、六月、〈(29)一つの偶像〉、十月、〈(30)きりぎりす〉を「木兎」に発表。

昭和三十五年（一九六〇）四十五歳

一月、「私の好きな言葉」を「ひだまり」（№12）に発表。二月、〈(31)猫と犬〉、三月、〈(32)隣人〉、四月、〈(33)女中の一人〉、九月、〈(34)苦い言葉〉、十月、〈(35)失った友情〉、十一月、〈(36)加内君〉、十二月、〈(37)無二の友〉を「木兎」に発表。十月一日、別府の保養所で知った東山千代子と結婚。

昭和三十六年（一九六一）四十六歳

一月、〈(38)最初の就職〉、二月、〈(39)小さな過失〉、三月、〈(40)自分の仕事〉、四月、〈(41)祖父の事〉、五月、〈(42)兄の結婚〉を「木兎」に発表、結語を付して「吾が思い出のアルバム」の連載を終える。四月、「恩人」を「心」に発表。十月、保養所を退所。千代子と共に明石市和坂八二八の七へ移り、それまで続いた療養所生活に一応の区切りをつける。十一月、自宅で小・中学生を対象とした数学と習字の私塾をひらく。

昭和四十年（一九六五）五十歳

五月、「後家」を「自我」第四号に発表。

昭和四十一年（一九六六）五十一歳

七月、明石市西明石町三ノ一九へ転居。十月十一日、テレビ番組〈日本の名作「暗夜行路」〉のために書いた手記「暗夜行路と僕」がNETテレビから放送される。

昭和四十二年（一九六七）五十二歳

一月、「バラ」を「半どん」第三十四号に、二月、「或思い出」を「心」に発表。

昭和四十三年（一九六八）五十三歳

一月、「日記から」を「自我」第八号に、二月、「惻隠の情」を「半どん」第三十七号に発表。春に、瀧井孝作の訪問をうける。十月、上京の途次、新大阪駅のエスカレーターで倒れ、肋骨数本を折る。十二月、前々年、テレビで放送した「暗夜行路と僕」が「淑徳国文」八号に翻刻掲載される。

昭和四十四年（一九六九）五十四歳

三月、「歓喜」を「心」に発表、第六十一回芥川賞候補作品となる。二十八日、妻と共に上京、はじめて志賀直哉を訪ねる。書信の往復が始まってから二十七年めに面会がかなった。宿舎のホテルに瀧井孝作の訪問をうける。七月、戯曲「春の宵」を「旭影」に発表。十八日、「鶸」を「神戸新聞」に書く。八、九月、「班長」を「旭影」に発表。

昭和四十五年（一九七〇）五十五歳

六月、「母の秘密」を「新潮」に発表。八月、「憶い出した事」を「半どん」第四十五号に書く。九、十月、「露の宿」を「心」に発表。

昭和四十六年（一九七〇）五十五歳

八月、「生命」を「半どん」第四十九号に、十月、「志賀先生の夢」を「心」に発表。二十一日、志賀直哉死去。二十六日、青山葬斎場での葬儀に出席のため妻と上京。十一月二十九日、三朝の療養所に入所、半月ほどして退所。暮に喘息悪化、明石市立市民病院に入院。

昭和四十七年（一九七二）五十七歳

二月十四日、妹操死去。三月、「東京の富士山」を「心」に発表。五月、豆本『夢枕』（「東京の富士山」「夢枕」「鶸」「蜘蛛」「夢」を収録。うち「夢枕」と「夢」は書きおろし。）をらんぷ叢書第十四篇として明石豆本らんぷの会から刊行。

昭和四十八年（一九七三）五十八歳

二月、「一年忌を迎えて」を「太陽」

（特集・志賀直哉・暗夜行路の旅）に発表。四月、志賀直哉の憶い出を、仮題「わが師恩の記」として「木兎」に連載をはじめる。四月、〈はじめに〉、五月、〈1、范の犯罪〉、七月、〈2、暗夜行路〉、八月、〈3、発心〉、九月、〈4、門出〉、十月、〈5、喝〉、十一月、〈6、一石〉、十二月、〈7、清流〉を発表。また、八月、「中国の思い出（二題）」を「心」に、「髭」を「半どん」第五十六号に発表。

昭和四十九年（一九七四）五十九歳

「わが師恩の記」の連載をつづけ、一月、〈8、初舞台〉、二月、〈9、友情〉、三月、〈10、帰郷〉、四月、〈11、母の死・其の（一）〉、五月、〈11、母の死・其の（二）祖父〉、六月、〈11、母の死・其の（三）母親〉、七月、〈12、妻の星〉、八月、〈13、雪崩〉、九月、〈14、大火〉、十月、〈15、蹉跌〉、十一月、〈16、松葉杖〉、十二月、〈17、悪夢〉を「木兎」に発表。四、七月に岩波書店から刊行された志賀直哉全集（第十二、三巻・書簡一、二）に、志賀直哉が直井潔に宛てた書簡四十二通（別に夫人宛一通）が、また、十二月に刊行された志賀直哉全集（別巻・志賀直哉宛書簡）に、直井潔が志賀直哉に宛てた書簡八通がそれぞれ収録される。六月、「松風村雨堂」（ふるさと山陽沿線）を「山陽ニュース」に、十一月、「川端康成氏の思い出」を「明石」（№3）に発表。十二月、「大根旅行」を「半どん」第六十二号に発表。十七日、神戸大丸百貨店でひらかれた四十九年度半どんの会文化賞受賞会で小説部門の第一回半どんの会芸術奨励賞を受く。

昭和五十年（一九七五）六十歳

「わが師恩の記」を、一月、〈18、嵐〉、二月、〈19、流離〉、三月、〈20、鼠〉、四月、〈21、コップの中（その一）〉、五月、〈21、コップの中（その二）〉と発表して第一部終りとす。

昭和五十一年（一九七六）六十一歳

二月、『一縷の川』（「わが師恩の記」を改題したもの。〈はじめに〉から〈19、流離〉までを加筆整理して収める）を限定千部の私家版として刊行。二十一日、神戸湊川神社会館で、阿川弘之、足立巻一、志賀康子、白川渥、竹中郁、陳舜臣、富田砕花らが発起人となり、『一縷の川』の出版記念会がひらかれる。五月、「お人好し」を「木兎」に発表。十月二十日、志賀直哉の墓参に妻と上京。

昭和五十二年（一九七七）六十二歳

一月、『一縷の川』（「一縷の川」「追慕記」「東京の富士山」を収録。うち「追慕記」は書きおろし）が新潮社から刊行される。四月、「夢」を「木兎」に、五月、「母」を「潮」に発表。『一縷の川』（私家版）が第七回平林たい子賞に決定。六月、受賞式に出席のため妻と共に上京。七月、受賞のことばを「新潮」に発表。「波」の表紙に「無価之恩」を揮毫。九月、「人間の証明」を「われら人間」第二号に発表。

昭和五十三年（一九七八）六十三歳

二月、『清流』（「清流」「母親」「雨」「しのぶ草」「松葉杖」「母の秘密」を収録）が湯川書房から刊行される。

〈唐井清六編〉